園長通信～こころ～ №５６

未来というもの

2024.6.25

「未来」というものがある。この言葉には、前向きなイメージがある。希望を感じさせてくれるところがある。そのためか、明るい未来などとよく使われる。

古代ローマ帝国の第１６代皇帝に、マルクス・アウレリウスという人がいる。五賢帝最後の皇帝である。ストア哲学などの学識に長け、良く国を治めたことから、ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌスに並ぶ皇帝すなわち五賢帝の一人と評された。ちなみに、『テルマエ・ロマエ』の舞台である西暦１３０年頃を統治していたのが、第１４代古代ローマ皇帝のハドリアヌスである。

マルクス・アウレリウスが、こんな言葉を残している。

未来というものは、来たるべきときに訪れてくれるものだから、未来を憂うのは、止めなさい。いま現在に真向かっているのと同じ気持ちで、未来に対処すればいいのだ。

妙に心に残った。マルクス・アウレリウスは、『自省録』という本を遺している。数多くの哲学者や政治家たちの座右の書として愛読されてきている。まさに名著である。人生をいかに生きるべきか、困難とどう向き合っていくべきかというヒントに溢れた本である。ここには、以下のような多くの名言というべきものがある。

何かするときいやいやながらするな。利己的な気持ちからするな。無思慮にするな。心にさからってするな。君の考えを美辞麗句で飾り立てるな。余計な言葉や行いを慎め。

あたかも一万年も生きるかのように行動するな。不可避のものが君の上にかかっている。生きているうちに、許されている間に、善き人たれ。

人は、未来のことを心配しがちである。そういう傾向がある。マルクス・アウレリウスは、自省録を通して、「おまえは、今を本気で生きているか」「短い人生、本気で生きろよ」と叱咤激励しているのかもしれない。マルクス・アウレリウスは、「あたかも人生の最後の日のように生きろ」と繰り返し述べている。なかなかできることではないが、折に触れ、考えてみることに価値があるように思える。